

県大生 清水の魅力探索

1年生9人実習「支え合いすてき」

【清水】高知県立大学の1年生9人が25、27日の3日間、土佐清水市に滞在して福祉拠点などを訪ね、地域の実情を学んだ。学生たちは成果発表で「土佐清水の人の温かさに触れ、互いに支え合う関係がこの街の魅力と気付けた」「かけがえない時間を過ごさせてもらえた」と振り返った。

1年時に県内市町村を訪ねて実情を体感する「地域学実習」(全学部共通)の一環。同市を訪ねた9人は「土佐清水の宝物は何か」をテーマに住民と交流して魅力や課題を洗い出した。一行は宗田節加工業者や「お庭カフェ」を運営する

住民を訪ねたほか、認知症カフェなどを開くあったかふれあいセンターを訪問。住民から「この場所があるおかげで集まって元気を確かめ合える」などと聞き、健康体操にも挑戦した。

独居高齢者の多さや交通手段の少なさなどの課題も認識した学生たち。一方、バス停で待つ知り合いがいれば声をかけて一緒に車に乗り合わせてスーパ―や病院に行くことを聞き取った学生は、最終日の発表で「互いに生活を支え合う関係があると分かり、すてきだと感じた」と報告した。看護学部神岡早希さん(18)は、清水弁で「いじけ



高齢者と体操するなど住民と交流する県立大生
(土佐清水市栄町のあったかふれあいセンター「きずなの家」)

る」という意味の「すっぴんこく」など滞在中に教わった方言を交えて発表。「今の子たちが(清水弁を)話

人の温かさに触れられた3日間。またぜひ訪れたい」と名残惜しそうに話した。
(山下正晃)